山陰地方における近世陶磁器の流通

佐伯　純也（米子市教育文化事業団）

１．はじめに

山陰地方は、中国地方の北部日本海沿岸地域一帯の島根県、鳥取県の範囲に相当し、その海岸線の延長距離が250㎞にも及ぶ長大な地域である。

この地域では、これまで近世遺跡の調査事例が少なく、肥前陶磁器の研究は遅れていたが、石見銀山遺跡や米子城跡などにおいて調査事例が蓄積されており、近年では松江城下町遺跡や鳥取城跡でも発掘調査が実施されるようなるなど、近世考古学に対する関心は徐々に高まりつつある。

２．山陰地方における肥前陶磁器の様相

島根県における初期の肥前陶磁器の様相は、胎土目積段階の資料が石見銀山遺跡や富田川河床遺跡、松江城下町遺跡で確認されている。その中でも松江城下町遺跡は、築城開始時期が1607年にほぼ限定される資料として重要である。ここから、1633年までに埋没したと推測される最下層の遺構面から見つかった肥前陶器は、胎土目積段階の資料が主体であり、砂目積段階の資料がほとんど含まれていないことが判明している。また、月山富田城の城下町遺跡である富田川河床遺跡では、洪水で埋没した砂層内から「寛永21（1644）年」銘の木簡が出土しており、これと共伴する遺物として、砂目積の唐津皿とごく少数の伊万里焼が出土しており、1640年代に至っても肥前磁器の占める割合は低かったことが窺える。

鳥取県内では、16世紀末に築城された米子城下町遺跡の上級武士の屋敷跡と考えられる33次調査地点から、礎石建物跡に伴って、瀬戸美濃系陶器や備前焼の建水、唐津焼の皿などが検出されており、中世末から近世初期にかけてのものと見られる資料が得られている。また、米子城下町遺跡や富田川河床遺跡では、李朝系陶器の出土例が多く確認されており、築城開始時期が遅れる松江城下町遺跡との違いが認められる。

最近、山陰地方での様相が明らかになってきた陶器擂鉢については、16世紀までは備前焼が中心となるが、17世紀以降には肥前擂鉢が増加するとともに、山口県の須佐唐津の擂鉢が出土するようになる。18世紀には関西系の擂鉢に加えて、在地で生産された擂鉢も見られるようになり、肥前擂鉢のシェアーは減少するものと考えられる。また、18世紀後半以降には、在地産陶器擂鉢の点数が増加する。

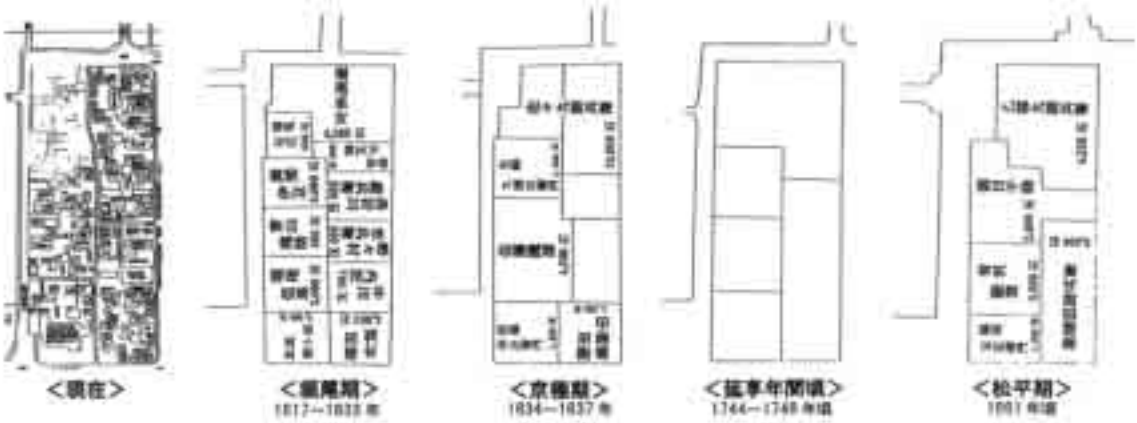
壺・甕類は、17世紀前半以降に備前焼から肥前産の製品へと移り変わるが、18世紀以降には島根県西部地方で生産された石見焼系の製品が中心を占めるようになる。ただし、旧因幡国に属する鳥取市近辺では、越前焼の甕が多く搬入されており、鳥取県内でも因幡と伯耆では様相が異なる可能性がある。

３．流通方法

陶磁器の流通については、港湾流通に関する文献が少なく不明な点が多いが、山陰地方は山地から海岸線までの距離が短く、河川は急流となりやすい地形となっており、島根県西部の河川や出雲の斐伊川・神戸川水系を除くと、河川を利用した水運はあまり発展しなかったものと推測される。また、中世から近代まで山陰の主要な産品であった鉄の運搬には、牛馬が用いられており、陶磁器も牛馬を用いた陸上交通によって流通したものが多かったと推察される。

第１図　山陰地方の主な近世遺跡

第２図　松江城跡　調査地点



第３図　松江城下町（家老屋敷跡）の変遷図

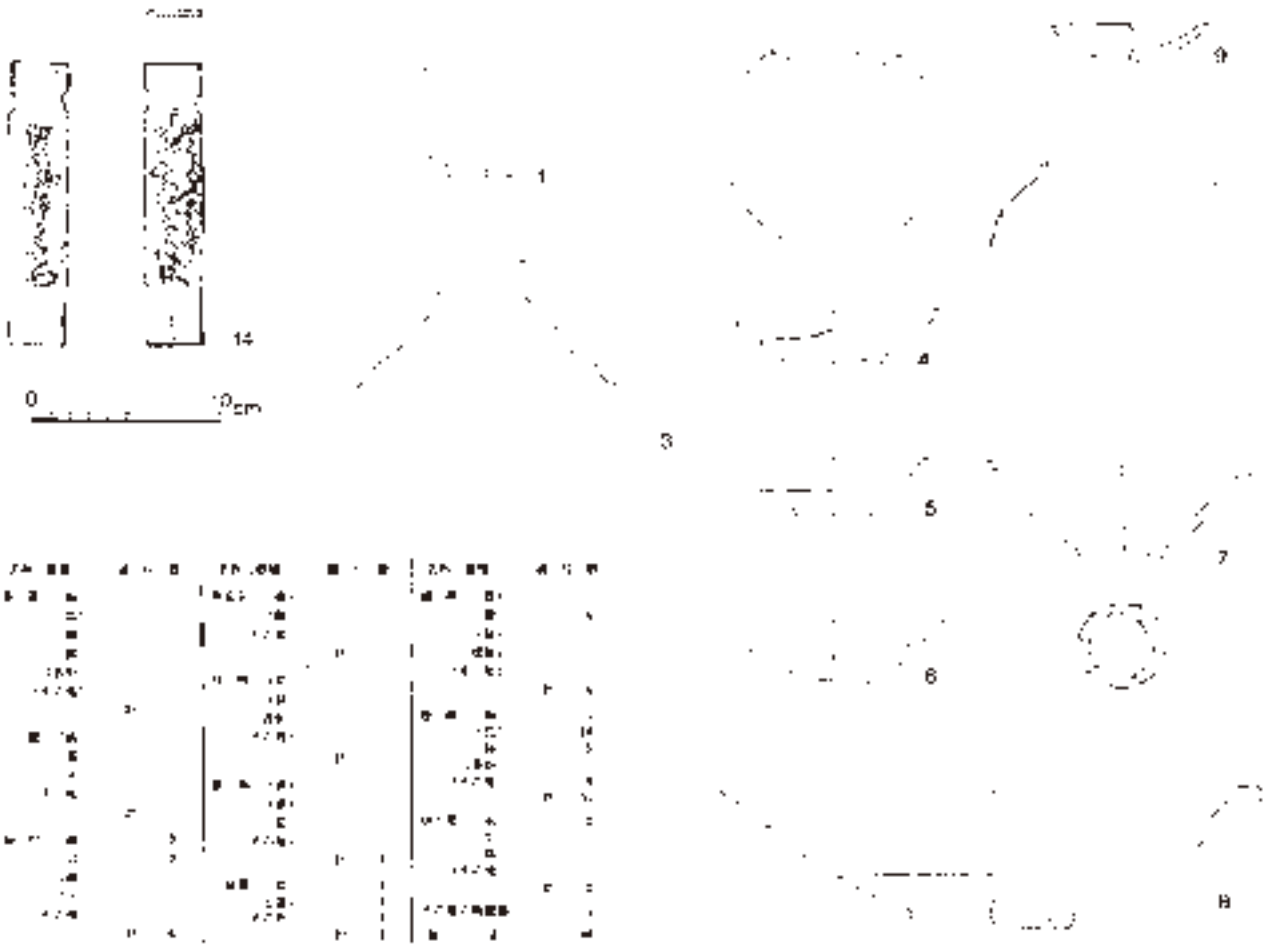
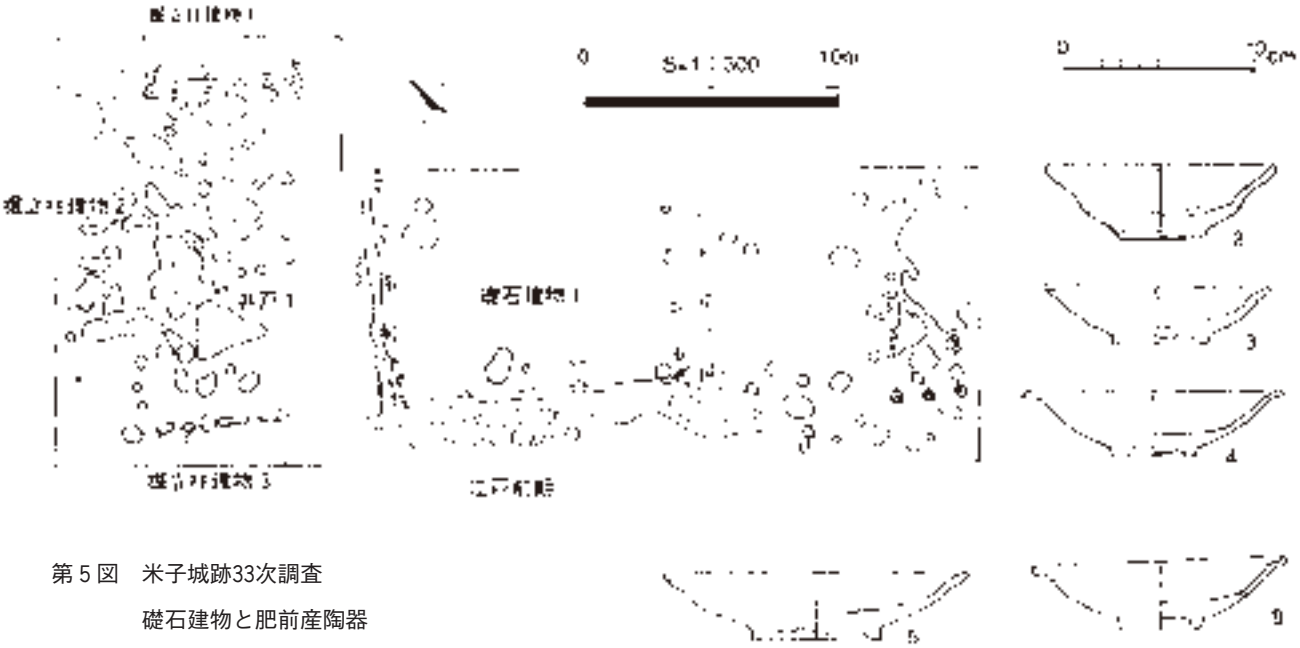


表１　砂層出土陶磁器数量表

第４図　富田川河床遺跡　砂層出土遺物



第５図　米子城跡33次調査
　　礎石建物と肥前産陶器